



東京八王子プロバスクラブ

創立 1995 年 10 月 18 日

2015～16年度テーマ

仲間の輪を広げ、楽しみの環を広げよう

第 241 回例会

日 時：平成 27 年 11 月 12 日（木）8：00～17：00

場 所：野外研修・バス車内

出席者：35 名（66 名中 35 名）出席率 53.6%

1. 開会 荻島例会委員長の司会で開会

本日の資料の紹介と出欠状況の報告。バースデーカードの贈呈は 12 月例会で。

2. 挨拶 永井会長



20 周年記念事業は、8 月から始まり長丁場でしたが皆さんお疲れ様でした。やっと普通のクラブ活動に戻ってまいりました。今日は野外研修と野外例会ということで、鎌倉の方にやってまいりました。天気も多分晴れると思います。

鎌倉には皆さん一度は多分来ていると思いますが、私は結構行っているのです。大変奥が深くて何回行ってもまた面白い事が出てきて、是非今日も楽しんで貰いたいと思います。先日 20 周年記念式典に見えた鎌倉プロバスの方のお話しでは“鎌倉は日本人じゃなくて中国人が殆どになってしまいました”とのことでした。今日は判りませんが、ミャンマーの方もいらしているかも知れません。変わった鎌倉も見られるのではないかと楽しみにしております。

一日楽しくケガのないように帰ってきましょう。

3. 20 周年記念事業実行委員長 杉山友一

杉山でございます。皆さんおはようございます。今永井会長よりようやく普段に戻りましたとご挨拶がございましたが、本当に長い間 20 周年につきましてご迷惑をおかけしたことも多々あるかと思います



が、よりよいお力添え有難うございました。

お陰様で、外に向けての事業はすべて完了致しております。あと残すのは、記念誌の発行ということでございますが、これ

も佐々木研吾パスト会長の話では、12 月例会にはお配り出来ると考えております。詳細のご報告は、12 月例会に事業報告、決算報告等申し上げる積りでございますが、それぞれの事業が順調に、しかも地域の中で大変高い評価を得て終わることが出来ましたことは、皆様のご協力のお陰であります。

一つだけ申し上げますと宇宙展につきましては、2 週間という長い期間展開をしたわけですが、この間ご協力を頂きました皆様は、延べ 100 名に達しました。文字通りクラブの総力を挙げて、成功に導くことができたと云う風に考えております。

見学者数は、3,944 名おおよそ 4,000 名弱ということで、当初は 3,000 名を予定しておりましたが、更に 1,000 名程多くの見学者をお迎えすることが出来たということでございます。これらは何もかもクラブ会員の皆様の努力の賜物でございます。

詳細は 12 月例会でご報告申し上げます。一言御礼を申し上げました。一つ申し遅れました。今日吉田事務局長がペーパーを一枚入れております。創立 20 周年記念事業反省会を 12 月 20 日、これはクラブ全員の皆様にお知らせしてあると思います。会費は 3,000 円ですが、お時間の取れる方は是非ご参加頂きたいと思っております。12 月の例会までに参加申し込みをして頂きたいということですので、よろしくお願い申し上げます。

4. 幹事報告 田中幹事

1) 20 周年記念行事が無事終了、皆様のご尽力が



見事に結集した結果でした。全員での反省会が12月に計画されています。詳細は吉田事務局長から説明があります。多数のご出席を。
2) 恒例になりました「今日は何の日」

11月12日(11月第2木曜日)は「ギネス世界記録の日」です。ギネス・ワールド・レコード社が2005年に制定。世界各地でギネス世界記録に挑戦するイベントが開催されます。1955年「ギネス世界記録」初版本がイギリスのパブで無料配布され、その後毎年発行。累計1億3,200万冊。

5. 20周年実行委員会 吉田事務局長

事務局の吉田です。先程、杉山実行委員長に触れて頂きましたけれど12月20日に創立20周年記念事業の反省会を準備いたしました。

このたびは会員の皆様全員のご協力、ご支援を頂き一緒に盛り上げて、本当に楽しく盛大な20周年記念のお祝いになりました。厳しい反省と楽しい慰労会は、12月20日の午後6時から、会場は徳寿庵です。会費は一人3,000円を予定しています。

最終申し込みは、12月例会でも結構ですが、今日予定のつく方は帰りのバス内で集めますので申し込キリトリ線以下をご提出ください。

6. 委員会活動報告

(1) 例会委員会 荻島委員長

本日の出席率は53.6%(66名中35名の出席)。12月10日開催の例会で新年会費5,000円を徴収する予定です。よろしくお願いいたします。

(2) 情報委員会 土井俊雄委員長

皆さんおはようございます。お手元にお配りしたプロバスだより240号でございますが、今回は創立20周年記念の内容と例会の内容の比重をどうするか考えまして、情報委員会の皆さんのご意見を基に制作しました。多くの皆さんの校正、レイアウト等へのご協力ありがとうございました。

(3) 会員委員会 馬場委員長

特にありません。

(4) 地域奉仕委員会 山口委員長

特にありません。

(5) 研修委員会

戸田委員長



おはようございます。今日は鎌倉方面の野外研修ということでご出席頂き有難うございました。もう少し多人数になると思ったのですが、まあ順当な線かなとも考えております。今日は添乗員さんがおりますので判らないことはお聞きください。

お配りした地図の中に私と宮城さんの携帯番号が入っておりますので、もし何かありましたらご連絡いただければ対処したいと思います。天気もよさそうなので今日1日楽しい研修にしたいと思います。よろしく願います。

(6) 宇宙の学校 吉田事務局長

宇宙の学校の報告をさせていただきます。平成27年度の宇宙の学校は11月8日教育センターで最後のスクーリングがあり無事全日程がつつがなく終わり、閉講式も八王子市教育委員会教育長を迎え行なわれました。報告書等のまとめは残っておりますが出来次第お手元にお届けします。

7. 同好会活動報告

ゴルフ同好会 小林貞夫会員

第6回多摩地区プロバスクラブ合同コンペは、八王子9名・日野9名・多摩5名の会員の参加を得て、10月30日、爽やかな秋晴れの相武カントリークラブで開催され、交流の輪を更に大きく広げることが出来ました。

大会の成績は次のとおりです。(敬称略)

優勝 杉山友一(八王子) ネット70

準優勝 矢島一雄(八王子) ネット71

第三位 田口賀夫(日野) ネット71

写真同好会 下山邦夫会員

今回の写真同好会の撮影会は、紅葉を求めて富士山麓を巡るコースでした。富士山に魅せられ、精進湖の近くに住みついたプロの写真家栗林秀旭先生の指導を受けながら、カメラを担いで回るというものでした。11月10日(火)の日帰り実施で、参加者は矢島、武田、下山の3名でした。

雨模様でしたが、ひるむ事はありません。濡れた木々もしっとりとした写真が出来る筈と出発。

最初は河口湖・紅葉回廊が見頃でしたが、写真に

しようとする、観光客が多く、雨もあってカメラの濡れを気にしながらですので、結構難儀。

そのうち雨足が強くなり、予定を省略して、栗林先生の精進湖畔の個人ギャラリーに行きました。さすがプロのしかも富士山だけを撮り続ける方の作品は、素人とは大違い。その撮影苦労話を暖かいコーヒーを頂きながら聞き、雨の治まるのを待って、湖畔の紅葉を狙う。霊峰はついに顔を見せませんでした。

野鳥公園でもう一度、濡れた樹木と紅葉の樹海に足を踏み入れましたが、やがて光もなくなって帰路につきました。写真同好会の活動にもっと多くの方に参加して頂く事を願いつつ。

カラオケ同好会 杉山友一会員

11月の予定は案内封書の中に入っています。

8. 全日本プロバス協議会報告

副会長 立川富美代

11月19日日野プロバスクラブの創立5周年の記念式典がありました。紅葉も美しくなった高幡不動尊の中の会場にて全日本プロバス協議会会長他、近隣のプロビアンが集まり手作りの暖かい記念式典でした。

11月21日 全日本プロバス協議会全国理事会が開催されました。北九州、鹿児島、大阪、尼崎、横浜、松任、八王子、旭川、等から理事・幹事が集まりました。平成28年の第7回総会の打合せ等また、各地域での活動報告が行われました。

第7回総会 平成28年11月20日 北九州小倉に決定。

9. その他

いちよう祭り実行委員会 佐々木研吾会員

いちよう祭りについて改めてお願い申し上げます。資料2枚入れてあります。A3の大きな方が催物、特にイベントの全容がスケジュールとして判るようになっていきます。A4の紙は「どこの会場がどこ」とコンパクトにまとめあります。尚後ほど下田会員から手形を販売して頂きます。オリエンテーリングはお勧めですので是非一度手形を持ってお歩きいただきたいと思います。私も何度か行っておりました

がこのところ忙しいので全部は回っておりませんが、追分から小仏峠まで8,000歩あるといわれております。全体を通して歩くのは少ないと思いますので是非お願いします。当日はC会場に9時までにお集まりください。詳細につきましては川村副幹事にお尋ねください。

10. 閉会の挨拶

岩島副会長



これから鎌倉に向かいます。今日は参りませんが報国寺という竹林のとても綺麗な所がございまして、私は鎌倉といえばまずそこを思い出します。それから東慶寺という、今日行かないと思いますが、

北鎌倉の駅を降りるとすぐのところに、明治から昭和初めにかけての有名な人たちのお墓がかなり固まっております。また駆け込み寺というように、大変困った女性たちがここに駆け込んだというお寺だそうですが、いずれにしても北鎌倉からずっと観察しますと、鎌倉というところは歴史を感じさせる本当に良いところでもあります。今日は精いっぱい……とどなたか言っておりましたように、奥深いところでございますので、ゆっくりと探索して頂きたいと思います。

野外研修

鎌倉散策の記

土井俊雄会員

11月12日研修委員会の行事である野外研修が例会委員会とタイアップして、車中例会として行われました。心配された天候も薄曇りから晴天となり、一同(37名)大いに喜んだ次第でした。研修先は、歴史の都鎌倉でした。冒頭会長の挨拶の中で八王子プロバス20周年記念パーティの席で鎌倉プロバスの方が、鎌倉はいまや日本人より中国人観光客の方が圧倒的に多いと聞かされた、との話が現地に行って現実のものとして実感されました。またウィークデーにも拘らず、観光客総体が多くこれもまた驚きでした。

まず、はじめに高德院にて鎌倉大仏を眺め、当時の技術でこのように大きな大仏がよく出来たものよ、と感心したものでした。ちなみに、この寺は浄土宗の寺院で本尊は「鎌倉大仏」(長谷の大仏)として知

られる阿弥陀如来（国宝）。山号は大異山。詳しく言えば大異山・高德院・浄泉寺というそう。開基も開山も不祥とのこと。



次は臨済宗建長寺派の大本山を見学、建物の大きさもさることながら、屋根のたたずまい等気品にあふれ、さすが鎌倉五山だと得心した。山号は巨福山。寺号は建長興国禅寺。本尊は地藏菩薩、開基は、鎌倉幕府五代執権北条時頼。開山は南宋の禅僧蘭溪道隆。次に鎌倉八幡宮の前の「峰本」にて和定食と創作そばをおいしく頂いた。食後店から歩いてわずかな距離にある、鶴岡八幡宮へと厳しい階段を皆フウフウいいながら上った。

階段を上る前、「公暁の隠れいちょう」の大木が以前台風だったか根元から折れたものを移植し、すでに1メートルほどの若木が根本から10本ほど元気に出ているのを見て、生命力の強さに感心した。

この八幡宮は康平6年（1063）8月に河内国（大阪府羽曳野市）を本拠地とする河内源氏2代目の源頼義が、前九年の役での戦勝を祈願した京都の石清水八幡宮護国寺を鎌倉の由比郷鶴岡に鶴岡若宮として勧請したのが始まりといわれている。

八王子「宇宙の学校」報告

情報担当 有泉裕子会員

第3日目報告

八王子「宇宙の学校」第3日は、9月27日（日）工科大学会場、10月4日（日）教育センター会場、10月24日（土）八王子北高校会場で行われ、どの会場もスクーリングテーマは「大気圧を体感しよう」「くつつく教室アドバンス」でした。

「くつつく教室アドバンス」は「宇宙の学校」特別協賛の株式会社スリーボンドの創立60周年を記念して

の教室で、車のボディー等に使用されている超撥水剤の効果とUV接着剤の効果をアピールしたものでした。ロボットによる接着剤の塗布（北高）



「大気圧を体験しよう」ではKU-MAの山下法昭先生によるご指導で、「空気圧の力の体験キッド」を利用して、マグデブルグの球を引き離し、空気を抜く実験等を行いました。

マグデブルグの球の引き離し



第4日目の報告

11月8日（日）、今年度最後の宇宙の学校のスクーリングが、教育センターで開催されました。テーマは先に実施された工科大（11月1日）、北高（11月7日）と同じテーマで、「万華鏡を作ろう」でした。その後、家庭学習成果発表会が行なわれました。家庭学習成果発表会は3会場合わせると参加186組の70%を越す135組の発表があり、スクーリングもすっかり地についたものとなりました。子どもの頃に大勢の前で発表するのは、いい経験で自信につながると思います。この後、坂倉教育長の閉校の挨拶があり、参加した子ども達全員に修了証が渡され、会の運営を担ったボランティアの方々と参加者との挨拶でスクーリングを終了しました。



寄稿文

「アンデス山脈急降下」 山口三郎会員

1979年4月、今から36年前、当時南米のボリビア国に在勤していた私は帰国命令を受け、大使館のあるラパスに業務上の現状や課題、今後の展望など報告と挨拶を兼ねて出向き、その帰途大変な経験することとなった。

その時、緊急避難時に作動するとされる酸素吸入装置が前方から順次、物凄い速さでその煩い騒音とともにダダッと落ちて来た。一体何が起きたのか？機内は恐ろしいまでの静寂に包まれた。首都ラパス（飛行場は標高4,080Mの高地）から第二の大都市サンタクルス（標高80Mの低地）へ向かうロイドアエレオボリビアエーノ航空、ボーイング727の機内である。時刻は既に午後7時を回っていて真っ暗、急峻なアンデス山脈を航行中であつた。

慌てるスチュアードスをよそに機長が落ち着いた口調で「当機は気圧を一定に保つ油圧装置が故障しました。これから急降下を繰り返しながら、途中のコチャバンバ空港（標高2,600M、第三の都市）に緊急着陸を試みることにになります。どうぞ皆様落ち着いて指示に従って下さい」とのアナウンスがあつた。

飛行機に乗るときには離陸前に、いつも当たり前のようにアナウンスされていたことが今、目の前で現実に起こっている。

何も見えないこのアンデス山脈で物凄い急降下が始まり、一体どれくらい？落ちて行けばいいのだろうか。機内は大パニックに陥った。機内の気圧をコントロール出来ないため鼓膜が圧迫され大変な痛みが続く。乗客のシスター達は十字を切り神へ祈るのみで大変な形相である。子供たちの泣き叫ぶ声、母親は必死で子供たちをあやしている。事情を良く理解出来ない外国人たちは顔面蒼白で覚悟を決めたようにも見える。

耳栓が配られ全員が必至で酸素吸入をしている。そんな時間が何分過ぎたことだろう。

再び機長のアナウンスがあつた。「当機は何とか持ちこたえることが出来ました。コチャバンバに緊急着陸することなく、予定どおりサンタクルス空港に

向かいます。」と。

心地よい空気が機内に漂い、何とまるやかな雰囲気包まれたことか。暫くして機首を下げた当機がサンタクルス空港に無事着陸した。大変な拍手が鳴り止まなかつた。額から出ていた脂汗もようやく止まったようである。

何とか事務所に戻ったものの、仲間たちからは「今宵はお前の送別会なのにこんな時間までなにをやっているんだ」とのきついお叱りを受けた次第である。

一期一会

橋本鋼二会員

「ふだん記」はみんなに文を書かせたいと橋本義夫が始めたグループ活動だが、その歴史をたどると、大野聖二初代会長ご夫妻らの参加で1968年に手作り誌を出したことに始まる。全国各地にグループが生まれたり、消えたりしながら、今でも活動を続けているグループもある。

第31回北海道ふだん記交流会北見大会が昨年6月網走湖畔で開かれた。ホテルで相部屋になったのは、当番の「さいはて」（北見）グループ代表Tさんとアメリカワシントン州から参加した荒井徳昭さん、それに私の3人であつた。

いろいろ話しているうちに、3人が国民学校で6年間を過ごしたいわば同期の桜、敗戦の年が5年生だったことにびっくりした。現在の小学校にあたる当時の国民学校は1941（昭和16）年から6年間しか続かなかつたので、この学制で6年を過ごしたのは我々世代だけと認識し合い、遅くまで語り合った。

日本がまだ貧しく、外貨持ち出し制限が700ドルに緩和された頃に、3人ともアメリカやオーストラリアなど外国で生活する体験をしていたのも共通していた。荒井さんは長野県出身、1969年アメリカに移住し、働きながらカリフォルニア大学の大学院に学んだ。その後ワシントン州の大学で教鞭を執つたのを始め、建設技術者として産油国などで仕事をしたりと多様な活動をされた。アメリカ合衆国の市民権を持つ。

私は科学技術庁の長期在外研究員としてオーストラリアの研究所に派遣されたのが同年で、有色人種の移住を制限する白豪主義の末期であつた。北海道のTさんも英語の研修で、そのころアメリカを初めて訪れたそうである。

ずっと海外に暮らしていた荒井さんが北見市で発行

している『さいはてのふだん記』に自身を含めた家族史を書き始めたのは5年前からであった。一夜を共にしたのが縁で、彼が帰米後も手紙のやりとりや資料をお送りしたりで交流が続いた。

あるとき、Youth という Samuel Ullman の詩文が同封されていた。これは、吉田信夫さんが17代会長就任時に、全員がチャレンジする心、前進する気持ちを新たにしようという趣旨でサミュエルウルマンの詩「青春」を引用したものの英語版だった。

彼は脊柱管狭窄症を患い、外見からは十分老いてはいたが、同封された手紙には、いつか八王子に私を訪ねて、戦争のこと、父のことなど話を聞かせて欲しいと書いていた。

その後、腎臓結石の手術を受け、尿道管を傷つけられ出血が1ヶ月も止まらないとの手紙を最後に音信が途絶え、やがて亡くなったことを知った。

横溢する彼のチャレンジ精神も歳には勝てなかったのか。再びみえることはなかったが、「青春とは人生の或る期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ」、「Youth is not a time of life; it is a state of mind.」を彼のメッセージとして持ち続けたい。

私の引き揚げ記録～戦後70年を追憶して～

武田洋一郎会員

終戦後70年。以前から自分の戦争体験として幼少時の満洲からの引き揚げについてわかる範囲で書いて、次の世代に伝えようと考えておりました。

実は、当時の引き揚げの様子を、いずれ聴く機会をと思っているうちに両親が他界し、何となくそのままになっておりましたので、はっきりとしたことは分かっておりませんでした。本土への帰還という負の事実、両親は当時のことを積極的に語ろうとはしていませんでしたからね。

最近、父の遺品の本を改めて整理していたところ、父とご一緒に行動されていた方の追想録を見つけました。そのなかに当時の具体的な行動日時をうかがい知ることができる記事があったのです。その本のタイトルは「一輪無限 追想録」 仙石秀夫著 平成6年5月27日発行のもの。著者が喜寿を迎えるにあたり、戦前苦楽を共にした同志がお祝いとして、ご本人の追想録を記念出版したもので、父も発行人の一人になっていました。

著者は昭和12年4月、南満州鉄道株式会社（満鉄）に入社、満鉄奉天鉄道局奉天電気区に勤務。

日本に帰還後、満鉄の同志と共に三和大栄電気興業株式会社を設立、日本電気株式会社の電設工事業を担っておりました。父も渡満、その奉天電気区に勤務し、同志として会社設立を共にしておりました。

さて、本稿では、その著書の記事を引用しつつ、終戦前後の史実と合わせ垣間見ることによって、私の置かれていた環境がわかるように書いてみました。『』内は私のコメントです。

昭和20年（1945年）『私は当時、1月に4歳になったばかりで当時の記憶は全くありません！』

2月4日 ヤルタ会談・・・対独戦後処理、ソ連の対日参戦決定

4月5日 日ソ中立条約破棄通告

7月17日 ポツダム宣言発表

8月に入り、戦局は風雲急を告げ、南朝鮮経由での日本帰還を図るため、満鉄関係者と共に朝鮮平壤への疎開開始。奉天から無蓋貨物車で平壤まで運ばれ、収容所への徒歩の隊列は大変なものであった。主食はかぼちゃが2切れ入った高粱のお粥の配給食など。『当時、平壤には日本人は約5万人在留していたといわれています。』

8月6日 広島に原子爆弾投下

8月8日 ソ連、対日宣戦布告。満洲越境爆撃と東部国境への砲撃侵略

8月9日 長崎に原子爆弾投下

8月15日 玉音放送（終戦の詔勅）、無条件降伏、日本の終戦の日

8月20日 ソ連軍が南下侵略、奉天に進駐。ソ連軍兵士はあらゆる物資を持ち去り、多くの日本人を犠牲にし、連行された人も多数であった。日本人居留民会という自助組織が出来ていた。

『私有財産は中国に没収され、引揚者だけでも国家予算に相当する19兆円はあるといわれています。ただ、中国民との諍いはなかったようで友好関係にあったようです。』

8月24日 ソ連軍平壤進駐、朝鮮を38度線で南北に分断する。

9月2日 降伏文書調印（戦艦ミズーリ号上）

米・英・仏・加・露：対日勝戦記念日

9月上旬 38度線を突破しての平壤から南朝鮮を

通過し日本へ脱出することは、山中の跋涉や急流の渡河など死に値するとして、北上して奉天に戻ることになった。幸い奇跡的に無事奉天に戻ることが出来、満鉄付属地内社宅に入ることが出来た。

奉天だけでも各地から収容所である小中学校の宿舎を求めて、膨大な人が集まっていた。ソ連軍は送還に反対し、日本人は今までの生活環境とは全く変化した中で極寒の満洲の冬を耐えて越さねばならなくなった。

『幼子の手をとり、背負いながらの行軍もどきの移動は母にとって如何に苦勞したかなと、今に思えば、冒頭に書いたようにそんな話はしたくなかったのだらうと思います。』

昭和 21 年 (1946 年) 当時、大東亜省は日本国内の食料・住宅事情等の理由から膨大な満洲居留民を受け入れることは出来ないとして、現地にとどまらせる政策をとっていた。

『この年の避難生活の状況は追想録にも見えていませんが、帰還許可が出るまで八路軍(中国共産軍)、ソ連軍の監視の中、我慢の生活だったと思います。』

4 月 1 日 『奉天春日幼稚園に入園したらしい。』

4 月に入り 国府中央軍、瀋陽(奉天)に進駐

5 月 13 日 日本人送還開始、21 年に約 100 万人が帰国。(終戦当時 160 万人の日本人が在満)

満洲引揚げ送還実施は、八路軍と国府中央軍(蒋介石軍)との間に立った米軍当局の熱意と圧力がなければ完全に遂行できなかったといわれている。

11 月 3 日 日本国憲法公布

昭和 22 年 (1947 年)

4 月 1 日 国内では新教育制度「6・3 制」スタート
『居留地内の春日小学校に入学』

5 月 3 日 日本国憲法施行

5 月 x 日 満鉄留用業務解除(中長鉄路公司)により満鉄関係者が帰還可能になった。日本人送還開始から 1 年遅れの決定であった。

7 月 7 日 満鉄の奉天居留者一行 300 名は鉄西収容所に集結入所。他の地域からを合わせるとここには 1,000 名もが集まった。

7 月 10 日 錦州葫蘆島(乗船地)に向け、送還用有蓋貨物列車 30 両で出発。途中沿線の治安が悪く、また雨などの天候不良で相当の犠牲者が出る事が予想され、著者の知人で中国豪農の計らいで有蓋貨

物列車の用意がされた。また餞別金を頂き、一緒に引き揚げる同志の家族の生活費や新会社設立の資本金に充当した。それは相当な額で、困難を乗り越えようとする日本人を救う、国を越えた中国人の友情を感じた。『一生の恩人としての感謝の念が書かれています。』

7 月 12 日 葫蘆島着、錦秋収容所(日本軍営の厩)での乗船前の検疫、生活必需品以外は没収。米軍の LST(戦車揚陸艦)に乗船。船中で死亡した人の遺体は水葬。

『ここで、疑問なのですが、色々な方が出版された引揚げ体験談を読むと、このようにスムーズに事が運んだ話はなく、鉄道移動の道中も途中停車あり、八路軍の検閲ありだったり、乗船にあたって何日も逗留したとの話もあるので、大体この辺りということではなかろうかと思うのですが、追想録では明確に日付が書かれています。』

7 月 13 日 佐世保港入港、検疫検査のため船中泊

7 月 14 日 隣接の早岐港に上陸、頭から背中の中まで DDT の洗礼を受ける。この時 1 人 1,000 円の旅費支給があった。

『上陸して「雀のお宿みたい」という私の言葉は語り草になっています。満鉄社宅は中層のアパートメントでしたので、木造の日本家屋を初めて見て、絵本に描かれていた家と同じだと言ったもの。満洲唱歌の「ペチカ」のように生活様式が違っていました。』

7 月 16 日 引き揚げ専用列車で東京着。同行の満鉄関係同志はそれぞれの帰省先に旅立つ。

『私の一家は、父方の福島市の実家に帰還の挨拶をし、父は会社設立準備のため東京へ、母子は母方の実家で過ごすことになりました。福島県耶麻郡の町立山都小学校に 8 月転入、新制小学校でひらがなを習うことになりました。』

「一輪無限 追想録」・・・この小冊子が、念願だった私の引き揚げ時の足取りを明確にしてくれました。

敗戦国の国民として帰還民となった状況の中で、多難の末によくぞ生き延びたという感は否めません。無論、私より一回りも上の方々の、学徒動員、戦地赴任などのご苦勞とは比較にならないところではありますが。

【ご参考】

満洲からの引揚げ「遙かなる紅い夕陽」 作画 森田拳次、発行 平和祈念展示資料館

<http://www.heiwakinen.jp/library/dbook/002/index.html#page=2>

東京オリンピックから半世紀（そのⅠ）

河合和郎会員

5年後に開催される東京オリンピックは、世界が注目する一大イベントであるが、国立競技場の建て直しやエンブレムの再募集などで賑やかな話題には事欠かないようである。

1964年10月10日、国立競技場における「東京オリンピック開会式」は、青く澄んだ秋空にジェット機による五輪のマークが見事に描き出され、一大ショーは大成功であった。

東京五輪では八王子の地でも自転車競技の会場となり、全市あげての準備と歓迎の体制がとられた。市議会には「オリンピック対策特別委員会が設置され、市役所には「オリンピック事務局」が設置された。

入所3年目の私は、この事務局に派遣され、準備から開催後の記念誌編集まで、3年間にわたり諸準備や広報活動に従事した。市内の各町会を回り、PR映画の上映や協力体制の準備に奔走もした。

八王子で開催された自転車競技は、ロードレース（一般道の周回コースを走るもの）とピスト競技（45度の傾斜を備えた楕円形の特設リンク）の2種目であった。

オリンピック事務局は東浅川の陵南会館（多摩御陵参道の中央線沿いに建てられた宮廷駅（現在建物は焼失し、跡地が公園となっている））に置かれた。

（編集の都合で、急遽「つぶやき」欄が必要となった。今後も紙面の状況で、半世紀前の「五輪事務局裏話」的な話題などを書きたいと思っている。）

俳句同好会便り

私の一句～11月の句会から

河合和郎

今月の句会に横濱PCの宮川会員が見学参加された。これからは同好会同士の交流も進めたいもの。

時雨るるや山廬の軒のなほ深し 池田ときえ

俳句らしい、絵画的な俳句。俳句の聖地、山廬邸

の落ち着いた佇まいがよく表現されている。

白き浜籠に溢るる紅ずわい 田中 信昭

弓ヶ浜の砂の白さとズワイガニの紅とをうまく対比させて効果的。中七の措辞で大漁を表現。

柿熟れて門前町の耀けり 飯田富美子

物静かな門前町に真っ赤に熟れた次郎柿が耀いている。十七文字で秋のきれいな一景が描けた。

秋光のスタンドグラスミサ染めて 立川富美代

長崎・五島列島の旅の一句。厳粛な祈りを捧げる人々をスタンドグラスの秋光が染めている。

七五三背伸びする児の抜衣紋 馬場 征彦

七五三の抜衣紋の着物姿がちょっと大人びて可愛い。娘の晴れ姿を温かくも見守る家族。

公園の落葉踏む音楽しかり 渋谷 文雄

落葉の音には不思議な魅力がある。落葉道を歩く音。風が落葉を鳴らす音。その音を楽しむ作者。

雲一つ添へて絵となる秋の空 東山 榮

俳句同好会の皆さんは詩人に変身しつつある。この句も年齢に関係ない若々しい感性から生まれた。

見渡せば紅葉且散る富士裾野 石田 文彦

富士周遊の一句とか。中七は最も俳句的な秋の季語。紅葉しながら散る風情の大景が迫ってくる。

冬立ちぬティーンズソウル勉強会 山形 忠顯

社会事象を詠む。これも18歳からの選挙権の刺激か。若者の社会や政治への参加を大歓迎したい。

夕暮れて煙れる小里落葉焚 河合 和郎

落葉焚は極ありふれた日常風景だった。うす煙のあの匂い。焼き芋の甘い匂いもたまらなく懐かしい。

編集後記

11月の始め体調が優れないのに雨の中の撮影会に出かけた私は嫌な予感が的中して風邪を引き、10年振りに寝込む始末。正に「鬼の攪乱」。悪い事は重なるもので、11月はプロバス便りの編集担当となるなど最悪のタイミング。

土井委員長始め河合副委員長にお手伝いを頂き、又さらに武田さんには野外研修の写真撮影までお願いして、どうやら責任を果たせた次第。

改めてお世話になった皆さんに心より感謝申し上げます。有難うございました。（矢島一雄）